

氏名	グプタ スウィーティ
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第180号
学位授与年月日	2014（平成26）年9月19日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	平林たい子論—社会主義と女性をめぐる表象の多様性と転換—
論文審査委員	主査 山口俊雄（日本文学専攻 教授） 副査 渡部麻実（日本文学専攻 准教授） 副査 三神和子（英文学専攻 教授） 副査 倉田宏子（本学元教授（5月に名誉教授）） 副査 竹内栄美子（千葉工業大学教授）

論文の内容の要旨

I

本論文は、平林たい子文学における社会主義と女性をめぐる表象の多様性と転換を明らかにする試みである。

これまでの研究史において、たい子は同時代の作家達と比べて文学的力があると言われてきたにもかかわらず、研究対象として取り扱われることは少なかった。従来の論では、作品が書かれた時代を問わず、たい子文学に描かれている女主人公については、「生へのすさまじいまでの意力」「烈々たる自己肯定欲」「強靱な生命力」「動物的な生命力」と言われるように、たい子自身のイメージと重ね合わせられ、「生命力」や「強さ」がしばしば指摘され、それ以外の側面について等閑視された。作品には現実にあった出来事が多々描かれていることは間違いないが、作品そのものより作家のイメージが先行し、登場する女性たちをたい子に重ねて読むことによってたい子文学の評価が偏ってしまったと言えよう。

作家から切り離して作品世界に光を当てたのは、たい子文学の最大の理解者とされる中山和子であった。中山論は、たい子のプロレタリア文学作品における「階級支配に性支配を重ねる」という特徴や、「男性中心の運動の現実への批判」などを指摘した点では刮目に値するものであったが、描かれた女たちについては、「通常の女の枠をはるかに超えるもの」とし、従来同様に主人公の「強さ」以外の側面に目を向けられなかった。確かに女たちにおけるたくましい側面を否定できないが、他の未踏の部分についても鉤を入れる必要があると考える。また、たい子の社会的思想には、アナーキズムからマルキシズムへの移行があり、戦前と戦後では作家的立場の変化

があったにもかかわらず、戦前のプロレタリア文学作品と、戦後の自伝的作品が同列に捉えられた。

先行研究では、俎上に載せられるのは代表作に偏っているが、本論では、平林たい子文学の総体を捉え直すことを目指し、戦前から戦後までの作品中代表作と目され、これまで比較的読まれる機会に恵まれていた『殴る』『荷車』『かういふ女』『その人と妻』『私は生きる』の再検討に加え、重要な作品でありながらもこれまで研究の手が及ばなかった『非幹部派の日記』『プロレタリアの星―悲しき愛情』『プロレタリアの女』を取り上げ、作家と切り離し作品世界のみを視野に入れて、評価することを試みた。

たい子文学における社会主義と女性をめぐる表象の多様性と転換を分析していく上で、四つの軸を立て、第一章「社会問題への目覚め」、第二章「社会運動内部での葛藤」、第三章「社会運動内部にみる問題点と可能性」、第四章「社会主義からの越境」という構成で展開した。時代のコンテクストを導入し、女性が、社会運動や私生活と向き合う姿を読み解くことで、たい子文学の主人公は、従来言われてきたようなたくましいだけの存在ではなく、多面性を帯びた人物であることを明らかにすることを目的とした。また、戦前から戦後に至る間の人間へのまなざしの変化についても探った。

II

まず第一章「社会問題への目覚め」では、働くプロレタリアの女を主人公としている『殴る』（『改造』一九二八・一〇）と『荷車』（『新潮』一九二八・六）を取り上げた。

第一節『『殴る』―闘う女の苦しみ―』では、母と娘のコントラストに焦点を当てることによって、階級社会における女性への搾取の実態がどのように形象化されているのかを検討し、その中でぎん子の新しさについて明らかにした。ぎん子の母は農婦であり、夫と共に働いてはいるが、夫に散々「殴られ」ても口答えすることはなかった。母のそのような惨めな様子を見て育ったぎん子は農村から都会へ逃避した。都会で仕事を得ることができ、父とは違う思いやりのある男に出会うが、会社では虐げられ、夫との関係も悪くなっていく。しかし、ぎん子はくじけることなく職場で一所懸命に闘おうとし、男の支配に対しても、強く反感を示した。ぎん子の社会の不公平を改善しようとする思いに変化をもたらしたのは、結末の場面であった。ぎん子は夫を「殴っていた監督に怒声を吐きかけた瞬間、逆に夫から「殴」られる。それまで強く闘ってきたぎん子は、遂に泣き出した。ぎん子の涙には、母の惨めな姿を見た時の悲しさ、職場で搾取されたことに対する憤り、報われなかった愛に対する切なさ、夫に理解してもらえなかったことに対する絶望など、強さの裏に隠された様々な感情が溢れていた。闘い続けてきたからこそ、ぎん子は他の女性に比べ、一層の苦しみを抱えていた。

ぎん子と母の結婚生活の形象化から、当時の資本主義社会の底辺の女性が階級と性による二重の支配を受けるということは、社会的にも私的にも、人間らしい生活のことごとくを奪われることを本テキストは訴えていると指摘した。

第二節「『荷車』—辛抱する女から復讐する女へ—」では、テキストにおける女工達の実態を検討し、最終的に階級問題に目覚めた女工達が男の労働者と団結し、資本家と闘う場面にも注目した。

工場の劣悪な状況下で、女工達は生計を支えるために一所懸命に働いていた。しかし、就労時間後も監視され、一切の外出も許されず、資本家の束縛から少しも抜け出すことができなかった。お花は、夫が突然誅首され、当初は独りで泣きながら厳しい状況に耐えていた。幼年工のおけいは、大人の女工達にいじめられ疎外されるという二重の虐待を受け、命を犠牲にするに至った。お米は、待ち望んでいた胎児の命を失うだけでなく、髪の毛も奪われ、十分な補償も得られなかった。このようにそれぞれの女工は辛い思いをしながらも、当初は辛抱して働いていた。

お花は、階級問題を意識していたが、工場主に立ち向かう勇気を持っていなかった。その勇気を与えてくれたのは、同じく酷使の対象となっていた小作人達であった。女達は遂に男達と団結し、工場を破壊して復讐することができた。本テキストでは、幼年工使用、予告なしの誅首、長時間労働、低賃金、不十分な休憩、不衛生な寄宿舎、作業中の事故の不十分な補償、就労後の束縛（労働問題）、資本家と夫による二重の支配・搾取、仕事・家事・育児による二重三重の負担（女性問題）、流産・乳児との分離による母親の苦しみ（母性保護の問題）、母親との分離・託児施設の欠如による子供の苦しみ（乳幼児保護の問題）、同じ立場にいらながらも女工間に起きる階層化（階層問題）など資本主義社会における様々な問題が表されており、リアルに描出されている点を評価されるべきであると指摘した。

第一章における分析により、男と同等に働いている女性であっても、資本家だけではなく身内の夫にも支配され、階級問題にも性差別にも苦しまされ、公私共々むしばまれている女の姿が浮き彫りになった。女たちは自立し、社会問題に目覚め、自分の権利のために立ち向かっていこうとし、成長をしていった。しかし、彼女たちは不当な扱いに対して闘う強い面だけではなく、妻、母や娘として、周囲の人々への思いやり、愛情、同情などの感情も示しており多面性を持つ存在として描かれている。さらに、『殴る』において一人の働く女性の孤独な闘いが描かれているのに対し、『荷車』では男女が一緒になって行動を起こすが、いずれも労働組合のような存在ができる以前の労働者の苦悩を浮かび上がらせている。

第二章「社会運動内部の葛藤」では、社会運動家として活動をしている女性が描いた『非幹部派の日記』（『新潮』昭四・一）と、その女性の後身が描かれた『その人と妻』（『中央公論』一九三六・三）を取り上げた。

第一節「『非幹部派の日記』—女性社会運動家の成長—」では、「私」の運動に対する姿勢の変化と社会運動家としての成長を明らかにした。また、色彩表現を多用するという創作技法にも注目してみた。

当初運動の方針に対し無自覚だった「私」の中に、夫から指摘されたことを契機として疑問が芽生えた。確信がつかない間動けないという夫と違って、「私」は行動を起こすことによって、夫に気付かされた疑問を自ら確かめたいとした。しかし、人に対する見栄と疑問との間で揺らぎ、

確信を持って行動する姿勢を貫くことができなかった。

「私」の運動に対する姿勢に劇的な変化をもたらしたのは、一緒に運動していた時の夫の逮捕であった。それまで迷いながら行動していた「私」は、運動することが命がけであるという切実な現実を突きつけられ、自覚的に闘うことを選んだが、結局、夫同様に捕らえられた。「私」は留置場にいた他の仲間達の運動のやり方にまたも疑問を感じ、初めて自分の考えを露にした。このように、決意を固めた「私」は自立した運動家として成長をみせ、最後まで闘うことができたのだ。

本テキストは、天皇制国家の下で国家権力と対峙する側面だけでなく、革命運動のなかでの対立や葛藤を抱えながら、社会運動家として次第に独り立ちしてゆく女性の成長過程を描出している。また、当時のプロレタリア運動主流派に対する批判を、感覚に訴える色彩表現をもって描き出したという表現技法の点からも、再評価に値することを指摘した。

第二節『『その人と妻』—社会運動家の妻の悩み—』では、夫婦を取り巻く周囲の変化を追いながら、かつて夫と一緒に運動していた妻は、今や運動家の夫を支える補佐役に回り、夫に対する複雑な思いを抱いていることを明らかにした。

労働運動が衰退したことにより組合員達の姿勢に変化が生じ、運動に対する気概がなくなったが、吉田は以前と変わらず運動に情熱を傾けており、強い意志を持っていた。妻一枝はそのような夫吉田と仲間達とのずれに絶えず思い悩み、夫に対する複雑な気持ちを抱いた。しかし、結局一枝は、夫の変節しない真っ直ぐな強い性格を好んでおり、他者に安易に同調しないところは人間の欠点ではないと思うようになり、夫を積極的に支えていきたいと思った。最後に至っても、自分の気持ちを全く理解できなかった夫に失望せず、むしろ励ましたのは、夫に対する愛情と信頼ゆえであったと指摘した。

一九三三（昭八）年、日本共産党指導者佐野学らの転向声明を契機に、ほとんどの左翼作家が転向し、転向を主題とする作品を次々と発表した。そのような時代に、社会運動家の夫婦を描き、間接的に当時の墮落した幹部や情熱を失った運動家達を批判する本テキストには、平林たい子の抵抗の姿勢が表れていると位置づけた。

第二章における分析により、当時男性中心の社会運動の中で、同じ運動に従事していても、女性は重要な任務ではなく、補助的役割しか与えられなかったが、『非幹部派の日記』においては、一人の女性が運動方針にただただ追従するのではなく、自ら判断し主体性を持って運動に邁進し、運動家として独り立ちする過程が描かれている。また、『その人と妻』に至っては、女が補佐役に回っても時代状況や時代に応じた運動の進め方をよく理解し、夫の大きな支えとして描出されている。以上により、女性が劣位の性として位置づけられていたことへの批判や、逆に女性に対して運動を切り開く力を期待していると読み取ることができよう。

いずれのテキストにおいても墮落した幹部、運動に対する気概を失っていた運動家たち、運動の観念的なやり方など当時の運動内部への批判が見られる。また主人公たちが、迷ったり、悩んだり、葛藤したりするなど様々な感情を内包しながら、懸命に生きる姿を描いていることが明らかであろう。

第三章「社会運動内部にみる問題点と可能性」では、男に寄生するプロレタリアの女と自立したプロレタリアの女を描いた『プロレタリアの星—悲しき愛情』（『改造』一九三一・八）と『プロレタリアの女』（『改造』一九三二・一）を取り上げた。

第一節『『プロレタリアの星—悲しき愛情』—社会運動の陥穽—』では、社会運動内部の男女の関係性、組織内部の問題点について検討し、社会運動の陥穽がどのように描出されているのかを明らかにした。社会運動が盛んに行われた時期に社会運動家の石上も当初強い闘争心で闘っていた。石上は投獄され、残酷な拷問にも屈せず同志の安田をかばい続けた。しかし、妻小枝を、身を挺して守っている同志に奪い取られ、今まで自分を支え闘いの原動力となっていた妻にも裏切られたことから変節し、運動への闘志を失ってしまった。

一方、夫がいなくなると、男に「寄生」する生き方しかできない小枝は生活に窮迫し、安田の金銭的な援助を受け、彼と同棲することにも服してしまった。しかし、夫に申し訳ないという呵責の気持ちで、妻としての義務と生活との葛藤に絶えず悩んでいた。

従来論では、小枝のような女性の「無防備な弱さふがいなさ」が社会運動の敗北の原因とされたが、女たちを取り巻く男たちの差別的な女性観に問題があったことを本論で指摘した。また、同じ社会運動に関わっている男の同志たちの、互いに対する連帯感の希薄さや、墮落した幹部の存在なども運動の敗北の原因だと言及した。極悪非道な国家権力だけでなく、運動内部にあった陥穽が社会運動を敗北に導いたことを、本テキストは訴えていると位置づけた。

第二節『『プロレタリアの女』—社会運動の可能性—』では、小枝と清子の対照性について検討し、清子の特質を明らかにした。清子も小枝も「プロレタリアの女」だが、生き方には決定的な差異が見られる。弱く控えめで、男性に依拠する小枝とは対照的に、清子は強く活動的で、働く「プロレタリアの女」であり、階級問題をよく理解し、組合運動に対して情熱を持っていた。清子は一番信頼していた愛人にも指導者にも裏切られるが、それでも諦めずに自己の思想を貫こうとし、ひたむきに闘っていかうとした。清子の闘う意欲は男性運動家の石上や安田、幹部などと比較しても優れていると指摘した。さらに、あらゆる個人的な感情を押し殺すことが望まれていた社会運動の思想に機械的に従うのではなく、疑問を抱き、主体的に考えているところを清子の新しさとして言及した。

第三章における分析により、社会運動内部における連帯感の希薄さ、男性運動家による性差別など、様々な問題点が描き出されていることを検証した。さらに運動の思想に機械的に追従することへの批判、家父長制への批判、同じプロレタリアの女同士であっても立場や状況が異なることで生じる格差の問題、託児所のような社会的施設の欠如による母性・小児保護の問題、またそのような施設の不足が女性の自立の妨げだったことへの批判なども込められている。

作者は二人の正反対の女性を登場させ、「寄生するプロレタリアの女」つまり、当時の典型的な女性のタイプを批判し、清子のような新しく「働くプロレタリアの女」の生き方こそ対等な男女関係の第一条件であることを呼び掛けていたといえよう。また、保守退嬰的な男性には社会変革の望みを見出せず、清子のような進歩的な女性に社会運動を切り開く可能性をみていたと捉え

た。

最終章である第四章「社会主義からの越境」では、社会運動から離れた女性を描いた『かういふ女』（『展望』一九四六・一〇）と『私は生きる』（『日本小説』一九四七・一一）を取り上げた。

第一節『『かういふ女』に見る人間表象の転換—「私」の〈多面性〉—』では、『かういふ女』の「私」の〈多面性〉を、戦前のプロレタリア文学作品『施療室にて』の主人公と対比しながら明らかにし、たい子文学における人間表象の転換についても言及した。

『施療室にて』の「私」が、社会運動家として社会変革を目指し、哀しいことがあっても毅然として立ちなおる強い女として描かれているのに対し、『かういふ女』の「私」には、夫を慈しみ思いやる妻としての側面、子供を亡くしたことの寂しさ・喪失感を表す母としての側面、人に依存する側面や人を思いやる側面などが見られ、元特高にも人間性を認める〈多面性〉を帯びた人物として描かれている。「私」の強さ以外の他の側面が描き出されていることが逆に、「私」の「たくましさ」や「人生への意欲」を、より鮮やかに形象化する結果をもたらしていることを指摘した。また、「私」の人間へのまなざしにも深化が見られることを明らかにした。

第二節『『私は生きる』—「私」の涙—』では、〈涙〉を軸に分析し、夫による介護、それに伴う交感を分析することで、先行研究で指摘されてきたような、生命に執着するがゆえのエゴイズムだけではない「私」の内実を明らかにした。

「私」には生命に執着するがゆえのエゴイズムがあるのだが、〈涙〉を通してみると、その裏には自身の生命への欲求と必死で介護する夫への思いとの間で葛藤が起こっていることが明らかになった。「私」の〈涙〉には献身的に介護する夫に対する同情の気持ち、申し訳ないという気持ち、また全面的に夫に頼らざるを得ず、病気であるがゆえのひげ目や悲しさがある。夫が自己を犠牲にして介護したことについて、「私」の「酷さ」が強調されてきたが、夫の介護の背後には、かつて自分を思いやった妻への愛情や贖罪の気持ちがあった。最後に至って、介護を通して夫婦間の対立がなくなり、二人の絆は深くなってゆくのである。

本テキストはたい子の自伝的作品ではあるが、介護する側と、介護される側の思いの重なる側面が多々みられ、介護をめぐる普遍的テーマを照らし出していると結論づけた。

第四章での分析により、戦前社会運動家として闘っていた女性の、運動から離れた後の姿を見ることができた。戦後の作品の主人公についてもかつて一貫して強い女性が描かれているとされてきたが、「私」の夫や子供との関係性、闘病や権力と対決する姿勢を詳細に分析することによって強さの根底に様々な感情が流れていることが明らかになった。また、他の章で分析してきた戦前のプロレタリア文学作品における国家権力側の人間に対する描写が非人間的だったこととは対照的に、本章で扱った戦後の『かういふ女』における元特高や看護婦が人間らしい人物として描かれており、彼らに対する「私」のまなざしが大きく変化していることに言及した。

たい子は戦前、権力と闘う立場から執筆していたが、戦後はそのような政治的課題から解放され自由な目を持って創作活動を進めた。そうした作者の立場の変化が、『かういふ女』に見られる人間表象の転換をもたらしたと指摘した。

III

以上のように、平林たい子文学における社会主義と女性をめぐる表象の多様性と転換を、八作品の分析によって跡付けた。全体を統括して次の点を読み解くことができた。

まず、たい子文学における女主人公の権力との対立をみると、職場で酷使された挙句、階級問題に目覚めた主人公は資本家と強く闘ってはいるが、闘っているからこそその挫折感、悲しみや苦しみを体験する（『殴る』）。他方、主人公はいつも強く闘っているわけではなく、社会運動に邁進する中で揺らいだり、迷ったり、葛藤したりもしている（『非幹部派の日記』）。夫との関係をも、社会運動家の夫を愛し、積極的に支えてはいるが、夫が運動家であるゆえに普通の家庭の幸福を求められないことの淋しさや、夫に自分の気持ちが理解されないことに辛さを感じ、夫に対し複雑な気持ちを抱いている（『その人と妻』『かういふ女』）。また、自分が病気にかかり夫に支えてもらう際に、夫に対して同情、申し訳なさや悲しさを感じる（『私は生きる』）。女たちは子供に対する執着心を持っており、子供を失ったことへの喪失感によって苦しんだり（『かういふ女』）、子供と離れて住むことに寂しさや悲しさを感じたり（『荷車』）、また子供を預けられるような場所の不在で働くことができず、生活のために他人に頼らなければならないことに苦しんだり（『プロレタリアの星—悲しき愛情』『プロレタリアの女』）している。たい子文学の主人公たちは、社会運動家としての側面、妻としての側面、母としての側面、娘としての側面、人を思いやる側面や人に依存する側面など、多面性を帯びている人物たちである。主人公は表面上、強く闘っている女性に見えるが、根底には様々な感情を内包している。中山論においては、たい子の女たちは「通常の女の枠をはるかに超えるもの」と否定視されたが、女たちは「通常の女」同様にあらゆる感情を抱いていることを明らかにした。

そもそもたい子が描いた女性たちにはどうして強さが際立つのだろうか。その原因は時代背景や描き方にあると言える。戦前の昭和時代とは、封建的家父長制度や家制度などが存在し、男女には社会的権利に大きな差があり、女性の自由を阻害する厳しい時代であった。それは一般社会だけでなく、社会運動の中でも男権主義が存在し、平等の社会を目指していた男性運動家さえも女性に対しては保守的な考え方を持っていた。社会主義は男女平等を達成するための手段だと信じて、運動を頑張っていた女性たちは結局性差別の対象となってしまった。そのような時代に、たい子文学は、自分の権利のために強く生きることを同時代の女性に訴えていたといえよう。また、運動への気概に乏しい男性に対し、女性は堂々と行動し成長していくことが多くの作品に描きこまれていることから、女性に社会変革をもたらす可能性を見ていると言える。これはたい子文学の特徴として捉えられる。しかし、女性の強さは否定視される傾向のあったことが、かつて評価されなかった原因の一つとなったのであろう。

たい子文学のもう一つの大きな特徴として挙げられるのは、同時代の社会運動内部における問題点を描き出す（『非幹部派の日記』、『プロレタリアの星—悲しき愛情』、『プロレタリアの女』）というところである。プロレタリア作家という立場から社会運動や思想を取り締まる国家権力への批判

は当然なのだが、組織に属していながらも、組織内部における問題点を描くということは、他のプロレタリア作家にはなかなか見出せない優れている点だと言える。たい子は一九三〇年に文芸戦線派を脱退するのだが、『非幹部派の日記』はその前年に発表されている。従って、たい子は組織を離れる前からただ運動に追随するのではなく、その問題点をよく認識し、作品化している。

また、たい子の戦前の作品における権力にかかわる描写は一貫しており、国家権力の手先の象徴として登場する人物たちは、非人間的な人物として描かれているが、戦後の作品では、残酷な元特高も、人間らしく描写されている。このように、戦前の権力と闘う立場からの執筆と、戦後政治的課題から解放され自由な目を持って創作活動を進めた場合の人間へのまなざしは、大きく変化している。この人間表象の転換は、きわめて重要であろう。

たい子は半世紀以上にわたる作家活動の中で、プロレタリア作家として社会問題や政治問題に目を向けるだけでなく、男性作家の視野に入らない、資本主義社会の底辺に生きる女性の直面するあらゆる問題に切り込み、女たちの苦しみや悲しみをきわめて詳細に描写し、女性作家ならではの鋭い観察眼を見せた。そういう意味では、文学史におけるたい子文学の存在を見過ごしてはならず、その作品世界を再検討することは大事な課題であろう。本論は、研究対象として取り上げられることの少なかったたい子文学研究を再起させる試みであった。今後の課題としては、本論で扱った『かういふ女』以降の『人生実験』『鬼子母神』『黒の時代』など、自伝的作品でありながらも様々なテーマを扱っているテキストを対象に、たい子文学のさらなる多面性を明らかにし、その魅力を浮き彫りにしていきたいと考えている。

論文審査結果の要旨

論文の概要

本論文は、平林たい子文学における社会主義運動をめぐる表象および女性をめぐる表象について、その多様性および転換の実態を明らかにする試みである。

従来論では、平林たい子文学に描かれている女主人公について、作品が書かれた時期の違いを問わず、「生へのすさまじいまでの意力」「烈々たる自己肯定欲」「強靱な生命力」「動物的な生命力」と言われてきたように、作者平林たい子自身のイメージと重ね合わせられ、「生命力」や「強さ」ばかりが指摘され、それ以外の側面については軽視されてきた。現実にあった出来事が多々作品内に描き込まれていることは確かだが、作品そのものよりも作家イメージが先行し、登場する女性たちを作家に重ねて読むことによって作品の評価が一面的なものに偏ってしまっていたのである。

作家イメージから切り離して作品世界自体に光を当てたのは、平林たい子文学の最大の理解者とされる中山和子であった。中山論が、平林のプロレタリア文学作品における「階級支配に性支配を重ねる」という特徴や、「男性中心の運動の現実への批判」などを指摘したことは大変重要であり高く評価できるが、ただ、描かれた女たちについて、「通常の女の枠をはるかに超えるもの」とし、主人公の「強さ」以外の側面にほとんど目を向けなかった点は従来同様と言わざるを得ない。確かに女たちにおけ

るたくましい側面は否定できないが、それだけでなく他の側面についても評価してゆく必要がある。

平林たい子文学における社会主義運動と女性をめぐる表象の多様性と転換の解明を目指す本論文では、四つの軸を立て、第一章「社会問題への目覚め」、第二章「社会運動内部での葛藤」、第三章「社会運動内部にみる問題点と可能性」、第四章「社会主義からの越境」という構成を取った。時代のコンテクストを踏まえつつ、女性が社会主義運動や私生活と向き合う姿を読み解くことで、平林たい子文学の主人公が従来言われてきたようなたくましいだけの存在ではなく、多面性を帯びた人物であることを明らかにすることに努めた。また、戦前から戦後に至る間の人間へのまなざしの変化についても探った。

論文の構成は、以下の通りである。

序章

第一章 社会問題への目覚め

第一節 『殴る』—闘う女の苦しみ—

第二節 『荷車』—辛抱する女から復讐する女へ—

第二章 社会運動内部の葛藤

第一節 『非幹部派の日記』—女性社会運動家の成長—

第二節 『その人と妻』—社会運動家の妻の悩み—

第三章 社会運動内部に見る問題点と可能性

第一節 『プロレタリアの星—悲しき愛情』—社会運動の陥穽—

第二節 『プロレタリアの女』—社会運動の可能性—

第四章 社会主義からの越境

第一節 『かういふ女』に見る人間表象の転換—「私」の〈多面性〉—

第二節 『私は生きる』—「私」の〈涙〉—

終章

続いて各章各節の概要を述べたい。

まず第一章「社会問題への目覚め」では、働くプロレタリアの女を主人公としている『殴る』（『改造』一九二八・一〇）と『荷車』（『新潮』一九二八・六）を取り上げた。

第一節「『殴る』—闘う女の苦しみ—」では、母と娘のコントラストに焦点を当てることによって、階級社会における女性への搾取の実態がどのように形象化されているのかを検討し、その中でぎん子の新しさについて明らかにした。

ぎん子の母は農婦であり、夫と共に働いてはいるが、夫に散々「殴られ」ても口答えすることはなかった。母のそのような惨めな様子を見て育ったぎん子は農村から都会へ逃避した。都会で仕事を得ることができ、父とは違う思いやりのある男に出会うが、会社では虐げられ、夫との関係も悪くなっていく。しかし、ぎん子はくじけることなく職場で一所懸命に闘おうとし、男の支配に対しても強く反発した。ぎん子の社会の不公平を改善しようとする思いに変化をもたらしたのは、結末の場面であった。ぎん子は夫を「殴」っていた監督に怒声を吐きかけた瞬間、逆に夫から「殴」られる。それまで強く闘ってきたぎん子はついに泣き出した。ぎん子の涙には、母の惨めな姿を見た時の悲しさ、職

場で搾取されたことに対する憤り、報われなかった愛に対する切なさ、夫に理解してもらえなかったことへの絶望など、強さの裏に隠された様々な感情が溢れていた。闘い続けてきたからこそ、ぎん子は他の女性に比べ、いっそうの苦しみを抱えていたのである。

ぎん子と母の結婚生活の形象化から、当時の資本主義社会の底辺の女性が階級と性による二重の支配を受け、社会的にも私的にも人間らしい生活のことごとくを奪われていることを本作品が訴えていると指摘した。

第二節『荷車』「辛抱する女から復讐する女へ」では、作中に描かれた女工たちの実態を検討し、最終的に階級問題に目覚めた女工たちが男の労働者と団結し、資本家と闘う場面にも注目した。

工場の劣悪な状況下で、女工たちは生計を支えるために一所懸命に働いていた。しかし、就労時間後も監視され、一切の外出も許されず、資本家の束縛から少しも抜け出すことができなかった。お花は、夫が突然誅首され、当初は独りで泣きながら厳しい状況に耐えていた。幼年工のおけいは大人の女工たちにいじめられ疎外されるという二重の虐待を受け、命を犠牲にするに至る。お米は待ち望んでいた胎児の命を失うだけでなく、髪の毛も奪われ、十分な補償も得られなかった。このようにそれぞれの女工は辛い思いをしながらも、当初は辛抱して働いていた。

お花は階級問題を意識していたが、工場主に立ち向かう勇気を持っていなかった。その勇気を与えてくれたのは、同じく酷使の対象となっていた小作人たちであった。女たちは遂に男たちと団結し、工場を破壊し復讐することができた。本作品には、幼年工使用、予告なしの誅首、長時間労働、低賃金、不十分な休憩、不衛生な寄宿舍、作業中の事故の不十分な補償、就労後の束縛（労働問題）、資本家と夫による二重の支配・搾取、仕事・家事・育児による二重三重の負担（女性問題）、流産・乳児との分離による母親の苦しみ（母性保護の問題）、母親との分離・託児施設の欠如による子供の苦しみ（乳幼児保護の問題）、同じ立場にいらながらも女工間に起きる階層化（階層問題）など資本主義社会における様々な問題が取り上げられ、リアルに描出されている点を評価されるべきであると指摘した。

第二章「社会運動内部の葛藤」では、社会主義運動家として活動をしている女性が描いた『非幹部派の日記』（『新潮』一九二九・一）と、その女性の後身が描かれた『その人と妻』（『中央公論』一九三六・三）を取り上げた。

第一節『非幹部派の日記』「女性社会運動家の成長」では、「私」の運動に対する姿勢の変化と社会主義運動家としての成長を明らかにした。また、色彩表現を多用するという創作技法にも注目した。

当初運動の方針に対し無自覚だった「私」の中に夫から指摘されたことを契機として疑問が芽生える。確信が持てるまでは動けないという夫と違って、「私」は行動を起こすことによって夫に気付かされた疑問を自ら確かめたいとした。しかし、人に対する見栄と疑問との間で揺らぎ、確信を持って行動する姿勢を貫くことができなかった。

「私」の運動に対する姿勢に劇的な変化をもたらしたのは、一緒に活動していた時の夫の逮捕であった。それまで迷いながら行動していた「私」は、運動することが命がけであるという切実な現実を突きつけられ、自覚的に闘うことを選び、結局、夫同様捕らえられる。「私」は留置場にいた他の仲間たちの運動のやり方にまたも疑問を感じ、初めて自分の考えを露わにする。こうして決意を固めた「私」は自立した運動家として成長を見せ、最後まで闘うことができるようになる。

本作品は、天皇制国家の下で国家権力と対峙する側面だけでなく、革命運動のなかでの対立や葛藤を抱えながら、社会主義運動家として次第に独り立ちしてゆく女性の成長過程を描き出している。ま

た、当時のプロレタリア運動主流派に対する批判を、感覚に訴える色彩表現をもって描き出したという表現技法の点からも再評価に値することを指摘した。

第二節『その人と妻』—社会運動家の妻の悩み—では、夫婦を取り巻く周囲の変化を追いながら、かつて夫と一緒に運動していた妻は、今や運動家の夫を支える補佐役に回り、夫に対する複雑な思いを抱いていることを明らかにした。

労働運動が衰退したことにより組合員たちの姿勢に変化が生じ、運動に対する気概が弱まってきているが、吉田は以前と変わらず運動に情熱を傾けており、強い意志を持っていた。妻一枝はそのような夫吉田と仲間たちとのずれに絶えず思い悩み、夫に対する複雑な気持ちを抱く。しかし、一枝は、夫の変節しない真っ直ぐな強い性格を好んでおり、他者に安易に同調しないところは人間としての欠点ではないと思うようになり、夫を積極的に支えていきたいと思い始める。最後に至っても自分の気持ちを十分には理解できない夫に失望せずむしろ励ましさえしたのは、夫に対する愛情と信頼ゆえであったと指摘した。

一九三三（昭八）年、日本共産党指導者佐野学らの転向声明を契機に、ほとんどの左翼作家が転向し、転向を主題とする作品を次々と発表した。そのような時代に、社会主義運動家の夫婦を描き、間接的に当時の墮落した幹部や情熱を失った運動家たちを批判する本作品に、平林たい子の抵抗の姿勢が表われていると位置づけた。

第三章「社会運動内部にみる問題点と可能性」では、男に寄生するプロレタリアの女と自立したプロレタリアの女を描いた『プロレタリアの星—悲しき愛情』（『改造』一九三一・八）と『プロレタリアの女』（『改造』一九三二・一）を取り上げた。

第一節『プロレタリアの星—悲しき愛情』—社会運動の陥穽—では、社会主義運動内部の男女の関係性、組織内部の問題点について検討し、社会主義運動の陥穽がどのように描出されているのかを明らかにした。社会主義運動が盛んだった時期に社会主義運動家の石上も当初強い闘争心で闘っていた。石上は投獄され、残酷な拷問にも屈せず同志の安田をかばい続けた。しかし、妻小枝を、身を挺して守っている同志に奪い取られ、今まで自分を支え闘いの原動力となっていた妻にも裏切られたことから変節し、運動への闘志を失ってしまった。

一方、夫がいなくなると、男に「寄生」する生き方しかできない小枝は生活に窮迫し、安田の金銭的な援助を受け、彼と同棲することにも服してしまった。しかし、夫に申し訳ないという自責の念とともに、妻としての義務と生活との葛藤に絶えず悩んでいた。

従来論では小枝のような女性の「無防備な弱さふがいなさ」が社会主義運動の敗北の原因とされたが、女たちを取り巻く男たちの差別的な女性観にこそ問題があったことを本論で指摘した。また、同じ社会主義運動に関わっている男の同志たちの互いに対する連帯感の希薄さや、墮落した幹部の存在なども運動の敗北の原因だと言及した。極悪非道な国家権力だけでなく、運動内部にあった陥穽が運動を敗北に導いたことを、本作品は訴えていると位置づけた。

第二節『プロレタリアの女』—社会運動の可能性—では、小枝と清子の対照性について検討し、清子の特質を明らかにした。清子も小枝も「プロレタリアの女」だが、生き方には決定的な差異が見られる。弱く控えめで男性に依存する小枝とは対照的に、清子は強く活動的で働く「プロレタリアの女」であり、階級問題をよく理解し組合運動に情熱を持っていた。清子は一番信頼していた愛人にも指導者にも裏切られるが、それでも諦めずに自己の思想を貫こうとし、ひたむきに闘っていこうとする。清子の闘う意欲は男性運動家の石上や安田、幹部などと比較しても優れていると指摘した。さら

に、あらゆる個人的な感情を押し殺すことが望まれていた社会主義運動の思想に機械的に従うのではなく、疑問を抱き、主体的に考えているところを清子の新しさとして取り上げた。

最終章である第四章「社会主義からの越境」では、社会主義運動から離れた女性を描いた『かういふ女』（『展望』一九四六・一〇）と『私は生きる』（『日本小説』一九四七・一一）を取り上げた。

第一節『かういふ女』に見る人間表象の転換―「私」の〈多面性〉―では、『かういふ女』の「私」の〈多面性〉を、戦前のプロレタリア文学作品『施療室にて』の主人公と対比しながら明らかにし、平林たい子文学における人間表象の転換についても言及した。

『施療室にて』の「私」が、社会主義運動家として社会変革を目指し、哀しいことがあっても毅然として立ちなおる強い女として描かれているのに対し、『かういふ女』の「私」には、夫を慈しみ思いやる妻としての側面、子供を亡くしたことの寂しさ・喪失感を表す母としての側面、人に依存する側面や人を思いやる側面などが見られ、元特高にも人間性を認める〈多面性〉を帯びた人物として描かれている。「私」の強さ以外の他の側面が描き出されていることが逆に、「私」の「たくましさ」や「人生への意欲」を、より鮮やかに形象化する結果をもたらしていることを指摘した。また、「私」の人間へのまなざしにも深化が見られることを明らかにした。

第二節『私は生きる』―「私」の涙―では、〈涙〉を軸に分析し、夫による介護、それに伴う交感を分析することで、先行研究で指摘されてきたような、生命に執着するがゆえのエゴイズムだけではない「私」の内実を明らかにした。

「私」には生命に執着するがゆえのエゴイズムがあるのだが、〈涙〉を通してみると、その裏には自身の生命への欲求と必死で介護する夫への思いとの間で葛藤が起こっていることが明らかになった。

「私」の〈涙〉には献身的に介護する夫に対する同情の気持ち、申し訳ないという気持ち、また全面的に夫に頼らざるを得ず、病気であるがゆえのひげ目や悲しさがある。夫が自己を犠牲にして介護したことについて、「私」の「酷さ」が強調されてきたが、夫の介護の背後にはかつて自分を思いやった妻への愛情や贖罪の気持ちがあった。最後に至って介護を通して夫婦間の対立がなくなり、二人の絆は深くなってゆくのである。

本作品はたい子の自伝的作品ではあるが、介護する側と介護される側の思いの重なる側面が多々みられ、介護をめぐる普遍的テーマを照らし出していると結論づけた。

審査結果

従来、「生命力」や「強さ」という作家イメージに覆われ、読みの方向性が狭く限定されてきた感のある平林たい子作品について、八篇の作品を精読することにより従来の読まれ方に修正を加え、平林たい子文学が提示する多様な側面を明らかにしようという本論文の目標は、基本的に達成されていると評価された。

とりわけ高く評価されたのが、父や夫の暴力、被害者である母と娘、再生産される女性ジェンダーの被害の様相が描かれる『殴る』を分析した第一章第一節、女性運動家が、国家権力との対峙のみならず運動内部の対立・葛藤を経て成長してゆく過程を読み解き、平林自身がまだ文戦派に属しつつも運動に追随するだけでない自立的な姿勢を鮮明に描き出していることを明らかにした第二章第一節、社会主義運動衰退期に当って周囲と妥協しない潔癖な運動家の夫の性格・姿勢に思い悩む妻の内面を読み解き、転向小説氾濫期における平林たい子の独自の文学的姿勢を明らかにした第二章第二節、ふ

たりの正反対の女性を登場させることによって「寄生するプロレタリアの女」と「働くプロレタリアの女」との対照性を明らかにした第三章、先行研究において「強靱な生命力」「たくましさ」「自己肯定欲」などが強調されてきた平林たい子作品が、実は根底に多様な感情を内包していることを、介護される身の「涙」の表現に着目して明らかにした第四章第二節などであった。

社会問題に目覚め、運動に従事する過程での葛藤のありよう、運動内部における妻として女性として悩み迷う姿が、おおむね作品発表の時系列に従いつつもさまざまな角度から検討され、「序章」において設定された問題は丹念な作品分析によってきちんと論証されたと言える。

ただし、問題点として次のような意見が出された。

第一章および第四章で「涙」に注目した点については、『私は生きる』と同時期に執筆された『涙』（『平林たい子全集』第三巻所収）なども含めて分析すれば、いっそう読みが深まったであろうという意見があった。

また、特に第二章第二節について、労農派（文戦派）系の活動家として既に時代遅れの観もある夫を励ますべくスターリンの覇権とトロツキー、ジノヴィエフらの追放を引き合いに出しているところなど、ソ連の動向への作者の認識について論及があれば、転向文学批判としての作品の意義がさらに明確になったのではないかという意見があった。

第三章第二節については、当時誤って流布していた「赤い恋」が『プロレタリアの女』の中で正確に捉えられている点にせつかく着目している以上、さらに当時の「赤い恋」をめぐる論争などについても論及があれば、主人公・清子の新しさがさらに浮き彫りになったはずだという意見があった。

第四章については、『かういふ女』『私は生きる』は、『施療室にて』とともにのちの長篇『砂漠の花』で改めてリライトされるので、そのような同じテーマの他作品との比較対照をさらに充実させれば、議論がいっそう深まったであろうという意見があった。

さらに、全体に関する問題点としては、次のような点が指摘された。

平林たい子が社会主義運動や社会問題をめぐって多面的な女性のありようを描いていることを明らかにできたという到達を踏まえて、平林たい子が根底に抱える女性観・人間観は畢竟どのようなものだったのかということにまで踏み込んで欲しかったという意見があった。

また、論文の問題設定の包括性、平林たい子の作家活動の長さに対して、主題的に取り上げている作品が必ずしも多くはないことが指摘された。例えば、アナーキストを描いた初期の『喪章を売る』（のち『嘲る』）などにも論及すれば社会主義と女性をめぐる表象のまた別の一面が見えてくる可能性もあったであろうし、平林文学のもうひとつの柱である〈やくざもの〉も取り上げれば、さらに多面的な平林文学の世界が見えてきたはずであろう。

このような問題点があるにせよ、これらは次なる目標として今後の追究が期待されるべきものであり、本論文これ自体が開拓した領域が広くまた深いこと、非常に価値あるものであることは動かない。

同時代評なども含め文芸評論の分野でこそ平林たい子はたびたび取り上げられてきたものの、文学研究の分野では中山和子の著書（『平林たい子』新典社、1999年）を除けばまとまった作品研究はほとんどなかった。さらに、プロレタリア女性作家研究についても、宮本百合子や佐多稲子など一部の作家を除いて、十全に論じられているとは言い難い現状がある。だが、平林たい子は、宮本百合子や佐多稲子と同様にもっと論じられるべき作家であり、その意味で、平林たい子文学を主題として取り上げた本論文はこれまでのプロレタリア文学研究の不備を補う価値を疑いようもなく有している。さ

らに、従来の見解とは異なる結論を導く新見に富むものであり、今後の平林たい子研究が本論文の達成の上に築かれるべきものとなることは間違いない。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士論文としての水準に達していると評価し、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得たことをご報告する。